

石川県立美術館だより

平成13年5月1日発行 第211号



山羊を飼う老人 当館蔵

彫刻家

YOSHIDA SABURO

吉田三郎展

四月二十八日(土)～五月二十七日(日)会期中無休

目次

彫刻家 吉田三郎展	2
名物裂と香道具、茶道美術名品展	3
常設展示室 主な展示作品	4
講演会記録(第47回日本伝統工芸展)	5

県美Q & A、企画展示室	6
美術館小史・余話(10)、各地の展覧会 ...	6
五月の行事案内、美術館の本他	7
所蔵品紹介、ミュージアムショップ 通信	8

企画展示室(第7~9展示室)

彫刻家

吉田三郎展

4月28日(土)~5月27日(日)会期中無休



杜若 当館蔵

響があつたと思われま。吉田はまた、多くの作家・文人との交流を持ったことでも知られています。板谷波山の住まいする東京美術学校にほど近い田端に居を定め、制作活動を進めましたが、板谷や吉田を慕って多くの文人や芸術家たちが相集いました。明治の頃以来、広く世に知られ、田端文士芸術家村とも称されました。わけても文化を

彫刻家吉田三郎の回顧展を開催いたします。吉田は明治二十二年金沢市に生まれ、大正・昭和と活躍した石川を代表する作家のひとりでした。芸術院会員、日展常務理事、日本彫塑家倶楽部委員長などを歴任し、日本彫刻界の中樞をなす作家でしたが、昭和三十七年、急逝し、その後四十年の月日が流れ、人々の記憶から薄れてきています。

本展では、石川の彫刻の先駆けとして活躍した吉田の全生涯をたどる目的から、初めて彫刻を学んだ石川県立工業学校での板谷波山・青木外吉との出会いに始まり、東京美術学校で席を同じくした北村西望・建昌大夢、朝倉彫塑塾を通じての朝倉文夫・都賀田勇馬・松田尚之などの交流や関係を取り上げながら、それら作家の作品をあわせて展示することで、吉田の活躍した大正・昭和の時代を振り返ります。

吉田三郎の彫刻は、飾り気のない真摯な男性像に特徴があります。代表作とされる「老坑夫」(東京国立近代美術館蔵)では、鍛えあげられながらも年輪を感じさせる老人の姿をたくみに表現しており、一方で、スポーツマンの若々しい力強さを表現したものも得意としました。こうした男性像制作の背景には、彫刻を始めるきっかけとなった金沢時代の師である板谷波山らほもとより、上京後の朝倉文夫・北村西望といった東京美術学校などの人物たちとの関わりも大いに影響があつたと思われま。

重んじた加賀百万石の伝統からか、金沢出身の多くの文人がその地に住まい大成していきました。都賀田勇馬・松田権六など作家はもちろん、詩人・室生犀星もその一人でした。吉田と犀星は同じ明治二十二年の生まれであり、田端の地で永く親交を深めましたが、世を去るのも同じ昭和三十七年という奇なる運命をそこには感じま。

今回展示される作品は約七十点ですが、戦災により戦前の作品が極めて少ないため、戦後のものが中心となります。しかし一貫して男性像を造り続けてきた吉田三郎ならではの、独自の作風をそこに見ることができまでしょう。

出品作家と主な出品作品

- 吉田三郎 老坑夫(東京国立近代美術館蔵)
- 板谷波山 少年少女像(石川県立工業高校蔵)
- 青木外吉 農夫像(東京芸術大学蔵)
- 北村西望 アダム(東京都現代美術館蔵)
- 建昌大夢 悶へ(東京芸術大学蔵)
- 朝倉文夫 墓守(台東区立朝倉彫塑館蔵)
- 都賀田勇馬 銭屋五兵衛像
- 松田尚之 想(当館蔵)
- 木村珪二 鱒雲ノ遺形(当館蔵)
- 堀 義雄 男の首(自刻像)
- 伊藤五百亀 渚(日本芸術院蔵)
- 中村晋也 ミゼレーレ(中村晋也美術館蔵)

観覧料

個人	大人	800円
	大学生	500円
団体(20名以上)	大	650円
	大学生	400円
個人	高中小生	300円
	高中小生	200円

当館友の会会員は受付での会員証提示により、団体料金で観覧になれま。



老坑夫 東京国立近代美術館蔵

講演会 聴講無料

演題 「父・吉田三郎を語る」
 講師 吉田 渉氏
 日時 4月29日(日)午後1時30分~
 会場 当館ホール

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

名物裂と香道具

4月27日(金)~5月27日(日)

名物裂(めいぶつぎれ) (金襴・緞子・錦・風通・縹珍・ビロード・印金・紗・絹・間道・モール・更紗など)は、そのほとんどが中国の宋・元・明・清の時代に製織されたもので、鎌倉・室町時代から江戸時代にかけてわが国に輸入された染織品です。わが国では茶道の発展とともにますます珍重されるようになりました。前田家では茶の湯に精通していた三代利常が、寛永十四年(一六三七)、当時海外貿易の唯一の窓口であり、舶来品の宝庫であった長崎へ家臣を遣わせて、金に糸目をつけずに蒐集しました。このコレクションは優れていると同時に種類が多く貴重であり、名物裂の宝庫ともいえるものです。このように収集された名物裂の中から、今回は、金襴、緞子、間道、モールを展示します。

香は仏教とともに奈良時代にわが国に伝わり、仏前荘嚴のものから平安時代には生活の中に香りを楽しむ空薫物に発展します。それは貴族の美意識の一角を形成する大切な要素となっていました。室町時代には足利義政のころに、三条西実隆が聞香の諸式を制定し、さらに志野宗信がそれを整理体系化し、茶道・華道とともに、香道は中世の芸道としての成立をみるようになります。江戸時代には組香(数種類の香を組み合わせたものを聞き分けること。和歌、物語、漢詩、故事来歴などに取材し、三〜七種類の香を組み合わせ聞き当てるもの。代表的な組香に源氏香、競馬香、宇治山香などがある。)が盛んとなり、ゲーム的要素が加味されるようになりました。今回展示する四種盤や桑十組盤などはその一部です。これに加えて香割道具や、組香に必要な各種の道具を納めた十種香箱、十三代藩主前田育徳に嫁いだ、十一代将軍徳川家斉の二十一女階子、すなわち浴姫所用の婚禮調度に含まれている香道具も合わせて展示します。

長い歴史の中で培われた香の世界のごく一部ですが、心のなかで香りを聞いていただけたら幸いです。

(高嶋清栄 学芸専門員)

本展は、当館開館に際し一括寄贈を受けた山川コレクシオンを中心に、館藏品・寄託品の中から、約六十点を撰び、次の三つの柱で構成した展示です。

【室町時代を中心とした茶道具】

この時代は、日明貿易などにより中国から唐物が請来され、それらを部屋に飾り、鑑賞する唐物数奇の茶の湯が行われ、やがて床の間形式で行われる書院茶の風が成立します。また茶種を味別する闘茶を催す会なども盛んに行われました。それがやがて一休宗純に参禅した村田珠光によって、草庵による侘び茶の風が形成され、和物の茶陶が茶席に取り上げられ、その心は武野紹により深められます。このコーナーでは本多家伝来の「銅獅子香炉」その他を展示します。

【桃山時代を中心とした茶道具】

侘び茶は、桃山時代に千利休により大成され、禅林の墨跡や和物の道具が多様されました。利休の没後は、その子少庵に受け継がれ、また利休門下の古田織部によって侘び茶の作為性が押し進められるなど多様な展開を示します。ここでは春屋宗園の一行墨跡、利休の消息、「織部香茶碗 銘隻履」その他を展示します。

【江戸時代を中心とした茶道具】

織部の没後、時代の茶風に大きな影響を与えたのが小堀遠州です。遠州は、先人たちの遺産を継承しながら、さらに中国へ好みの茶陶(古染付、祥瑞)などを注文、使用するなど「綺麗さび」の茶風を創造しました。またこの時期、利休の孫、宗旦や金森宗和、本阿弥光悦といった人々も活躍、加えて諸藩の大名や武士、あるいは富裕な町人たちが茶の湯を愛好するなど、今日の茶道繁栄の基が築かれたといえます。ここでは「古今和歌集巻第八断簡 昭和切」、光悦作「赤染茶碗 銘山科」その他を展示します。

また今回は当館の茶道具コレクションを特徴付けている香合・伽羅箱の優品をコーナー展示いたします。

(末吉守人 普及課長)



段々釜 初代宮崎寒雉

常設展示室(第2展示室)

特集

茶道美術名品展

4月27日(金)~5月27日(日)

常設展示室

主な展示作品

4月27日(金)~5月27日(日)

●=国宝 ○=重要文化財 △=重要美術品
□=石川県指定文化財



和蘭陀白雁香合 デルフト窯



ロシアの少女 藤井外喜雄

前田育徳会展示室

特集 名物裂と香道具

- 双鳳丸文様金襴(二人静金襴)
- 小石畳地靈芝文様金襴(大燈金襴)
- △ 竜三爪唐草文様緞子(珠光緞子)
- 編格子文様間道(船越間道)
- 葵紋時絵調度品 浴姫所用
- 厨子棚 源氏箱 香炉 香盆
- 村梨子地唐松唐草御紋時絵十種香箱
- 桑十組盤
- 四種盤

第1展示室

● 色絵雉香炉

野々村仁清

第2展示室(古美術)

古九谷
色絵布袋図平鉢

野々村仁清

色絵鳳凰図平鉢
青手樹木図平鉢

藤原俊成

● 特集 茶道美術名品展

古今和歌集巻第八断簡 昭和切

千利休

竹時絵浪に亀図二重切花入

初代宮崎寒雉

銅獅子香炉 本多家伝来

野々村仁清

段々釜

本阿弥光悦

第3・4展示室(油彩画・彫塑・造形)

1982年 私

馬に凭る(B)

アルゴス追放

Venus Anadyomene

野焼

特集 石川洋画の先駆者達

ギター

翁

鴨居 玲

高光一也

田賀亮三

宮本三郎

森本仁平

飛鳥哲雄

早田楽斎

ロシアの少女

彫塑・造形

二一十

若日の影

春

藤井外喜雄

石田康夫

矩 幸成

得能節朗

第5展示室(工芸)

特集 館藏品にみる

石川県立工業高校ゆかりの作家

陶芸

紫金磁葡萄彫紋花瓶

上絵染付 閑

漆工

浮遊

平文千鳥盛器

染色

異郷

友禅訪問着「ねじ花」

金工

白銅浮彫「豊穰なるライン」

霰真形釜

第6展示室(日本画)

天女衰相

窓辺の静物

逢か

二人

生々

虞美人草

牛

飛鳥をとめ

このページでは主な展示作品を掲載しています。各室ではこれらのほかに多数の作品が展示されています。(第1展示室は色絵雉香炉二点のみ)。

観覧料

一般 350円	個	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円	人	大学生 220円	
高校生以下は 無料		高校生以下は 無料	



白銅浮彫「豊穰なるライン」
蓮田修吾郎

春 得能節朗



二人 中村徹

講演会記録

工芸の道を求めて

講師 福田 喜重氏
(重要無形文化財 刺繍 保持者)

昭和二十年代から三十年代にかけては、「日銭が幾らか」というような、ものを作る者に対しては非常に厳しい時代で、私も日銭を稼いだらまたそれを使うという、毎日がそういう循環で明け暮れた一時期がございました。そういう時期を経まして、ある時、芸というものは、工芸というものはどういふものかと考えて、辞書を引きましたら、「ある修練を経てある種の技能を身につけたものを芸という」んだと書いてありました。ああ、そういうことなのか、工芸というのはこういうことで、大工さんは大きく工夫するから大工といふのと、その後何かそういう理屈ばかりを振り回すよになり、その結果、いったい自分は何であるのか、どういふことをすればいいのだろうかとか苦しむことになりました。ちょうどそんな頃、昭和四十五年に万国博覧会が大阪でございました。

万国博覧会では、工芸とはおよそ無縁なものの展示ばかりで、そこに疑問を感じておつたんです。そして自分の考えていることは、さてこれで良いんだらうかと思つていた矢先に、まだ十何回目という頃でございましたが、京都の高島屋さんという百貨店で伝統工芸展がありました。それを拝見しまして、こんな先生方がたくさんおられるのかと、ぼさつとしておりました私の頭に激しいものが走りまわりました。それからやっと工芸というものに目覚めて動き出すんですが、今日の主題の「工芸の道を求めて」ということはおよそ裏腹な青年時代であつた訳でございます。

何とか入選を果たし、おかげさまで三回目と五回目にも賞をいただきました。四十八歳で初めて東京で個展を開きました。とは言つてもあの頃は個展はやはりでもあり、まだ個展を開くという意味は分からないままに、何かそれが一つ自分の職業に箔がつくような思い

でやつたのです。そして皆さんいらつしゃいますと、口をそろえて「ああ良いことをなさいました」「お偉いですね」などと言つて下さいました。後になって、「いったいなんのためにやつたのかな、あれは何であつたのかな」と虚しい気持ちになつてしまいました。

しばらくその虚しさをどうにも埋めることが出来なかつたのですが、ちょうどその頃、漆の松田権六先生が京都で講演をなさいました。そしてその時の先生の激しきにもすこく心を打たれまして、こんな先生がおられるから今の日本工芸会、伝統工芸展もあり得るんだということをつくづくと感じました。その時にある若い木工作家の方が、松田先生に、「今の様に漆が悪くなり、素材が悪くなつたのはどうすべきでしょう、このままでいくとどうも工芸というものが廃れていくのではないかと憂いを述べられたんですが、その時に先生がおっしゃつたことは、「現在の素材、現在のものを懸命に研究していつて作品を作り上げることが伝統といふものを続けて行くことなんだから、材料だとか素材とかいふものにあまりに頼りすぎると、かえつて良い作品が出来ない」確かこのようにおっしゃつたかと思ひます。それも私が心打たれたことでございます。

創造といふものは人生にかけがえのないことで、人生即ち創造なんです。自分を創造することが人生であるわけですから、人生の創造をそのまま見せるものの一つが工芸といふものでしょう。ですからあれは人生の一つの形だと思つて下さい。そういう風に見る人も作る人も考えてやっていたかと思ひます。人真似でない価値を作り出すことが創造といわれております。それは大変なんですけれども、自分一人がつくつたものといふのは世界中に一つしかない訳でございます。真似をするなら真似をしたものよりも上手に作ればいいんですが、真似といふのは一万作れば九千九百九十九まで原物より悪いんです。外国の絵画では、真似の方がうまかつたというものもあるようですが、まず真似は真似ですから、精神性まで真似することは出来ませんし、人真似はやめておいた方がいいということにも私は気が付いた訳でございます。

精神性とはやつぱり心の問題ですから、スケッチをしなければなりません。どんな先生でも、ものをつくる前には、いろいろ心の中を表現するためにスケッチをする訳ですが、スケッチをするということは、その形そのものを、きざつぱく言うなら、愛すると言ひますが、愛おしく思う気持ちをそのまま表現していくことなのです。今回の染織の受賞作品の、東北の山岸さんという方の作品は、非常に素直に縞が出ておりました。各先生方もあの素直さにもすこく心打たれたんだと思ひます。混沌の時代は原点に返るものですが、二塚さんの作品も、防染という染色で一番大事なことをなさつていた訳です。

その二つの作品が賞に選ばれたことは、原点に返るといふこと、あるいはものを愛するといふことの重要性を示しています。これは工芸をする人にとつては非常に大事なことの二つであるかと思ひます。愛せなかつたらその形は良くなりません。愛したものの、心がそこへ赴いたものは、必ず共感を呼ぶ形が出来たり、色があつたりします。共感を呼ばないものは良い作品とは言えないでしょうし、共感こそが感動を引き出し得るのです。自分の心の表現がどのように相手に伝わっているかといふことが、一番大事なことで思ひます。

緊張こそ美の源であるのですが、ものを楽しみながら見て、楽しみながら作り、自分が自然と一体になつて、いかに自分の本能をうまく使つかといふことが、工芸の世界であるように思ひます。だから工芸といふのは決して出来ないことをやるのでなしに、出来ることをうまくやつていくことが工芸なのです。「出来ないことは出来ないことで研究の余暇に置いておいて、今出来ることを一生懸命やりなさい」と、松田先生がおっしゃつたんですが、そのように私も思つております。とは言えども、私も毎年伝統工芸展が近づいてくると寝汗をかきますし、大変苦悶します。家族との会話も途切れますし、息子たちにはまた始まつたと言われて、ちよつとしたことにもカリカリくるんです。でも出来ましたら七十過ぎれば、楽しんで作るようになってみたいと思つた今でございます。

(第四十七回日本伝統工芸展「にちなんで、平成十二年十月二十四日に行われた講演会の内容を、当館の責任で要約したものです)

展示室の換気は大丈夫？

Q 展示室には窓がなく、少し混み合うと何か息苦しい感じがします。換気がなされているような様子もありますが、いつもさわやかな空気の中で鑑賞したいと思うのですが、いかがでしょうか？

A 当館に限らず、ふつう美術館では、展示物の保存管理上、空調設備により一年を通じて温度や湿度などを一定に保っています。もちろん外気を取り入れながらの調整なので、換気は十分です。そして空気環境測定調査も実施しながら、快適な環境の維持に努めています。外から入ってこられた皆様には、時には冬暑く、夏には寒いと感じられるかもしれませんが、これは外気との温度差のためなのです。また、空調の音が鑑賞の妨げにならないよう、風量についても注意を払っていますので、肌風が感じられず、ご質問のような疑問を持たれたのではないかと思います。

企画展示室

終わりなき記憶の旅ーデ・キリコ展

六月一日(金)～二十四日(日)
(第7～9展示室)

本年は「日本におけるイタリア年」として日本各地で様々な文化交流が企画されていますが、本展覧会もその一環として開催するものです。形而上絵画の原点とされる一九一〇年代の作品から、様々な形態を模索し、変貌と研鑽を重ねながら原点に回帰した晩年までの約百点により、謎に満ちたキリコ芸術の軌跡をたどるものとして展覧いたします。

入場料

一般一、二〇〇円(九〇〇円)中・高校生八〇〇円
(五〇〇円)小学生五〇〇円(三〇〇円)

当館友の会会員は会員証提示により団体料金
金沢市香林坊一五一 北國新聞社事業局
連絡先 〇七六 二六〇 三五八一

県美 Q&A

薄暗い館内をもっと明るくしたら？

Q 展示室の照明が薄暗く、展示品の細かい部分がよく見えません。もっと明るくした方がよいと思うのですが…。

A そうですね、本当はもうちょっと明るい場所で細部まで見ていただきたいのですが、作品の中には光を嫌うものがあります。光に含まれる紫外線によって色があせてしまったり、熱による収縮で痛んでしまうことがあるのです。特に古美術品は、長い年月に耐えてきたものばかりなので、あまり光を当てられないのです。どうしてもはつきり見たい場合、まわりの人に迷惑にならないように、ペンライトなどでその部分だけを少しだけ照らして見ること(施設によっては禁止のところもあるので注意!)はできます。展示室までの途中の廊下が暗めなものも、入室する方々の目を慣らしているのです。

各地の展覧会

五月

開催日程 休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

国宝醍醐寺展

東京国立博物館平成館(東京都台東区・〇三三 三三二) 5/13まで

ジョルジュ・ル・ス展 幾何学的形態の中の緊張 6/3まで

東京都庭園美術館(東京都港区・〇三三 三四四) 〇二〇(一)

アレクサンダー・カルダ 展 5/13まで

富山県立近代美術館(富山市・〇七六 四二二 七一一)

ルノワール展 異端児から巨匠への道 1870-1892 4/21～6/24

名古屋市美術館(名古屋市中区・〇五一 二二二 〇〇〇)

特別展 小倉遊亀 4/21～5/27

滋賀県立近代美術館(大津市・〇七七 五四三 一一一)

前田青邨展 4/24～6/3

京都国立近代美術館(京都市左京区・〇七五 七六一 四一一)

古伊万里のすべて 5/20まで

神戸市立博物館(神戸市中央区・〇七八 三九二 〇〇三五)

世界四大文明 中国文明展 6/17まで

広島県立美術館(広島市中区・〇八一 二二二 六二四)

美術館小史・余話

10

嶋崎 丞すま 当館館長

今日「学芸員」といえば、大方の人は博物館における専門職員のことであるということは知っているが、旧美術館が開館して間もない昭和三十年代頃は、「新聞社の学芸部職員のことですか？」といわれる程、一般にはなじみの無い職業であった。しかし前号で述べたように、博物館法の適用を受け、登録博物館として認定を受けるためには、学芸員の有資格者を置かなければならないことになっていた。私はその頃極めて少ない有資格者の一人であったことが幸いして、設立されたばかりの旧美術館に就職することができた。しかし、いざ美術館に勤務してみると、美術に関して極めて精通した大先輩がおり、その先輩から「君は私らが持っていない資格を有する学者先生なのに、何も全く知っておらん」と毎日皮肉をいわれ、資格を持って就職したこと自体が苦痛に感じられる程、学芸員という職種は、特殊な職業であるかのように思われていた。今日でも学芸員は、勤務する博物館が収蔵する資料を中心とする「研究者」であるかのように思われているが、そのことは当然必要であるが、それにも増して博物館へやってくる人や地域の人々に対して、資料を通して博物館の教育活動を実施していく実践者であることが求められる。そうした学芸員像が、初期の頃は全く理解されておらず、資格を持って現場へ飛び込んでいった若き学芸員たちは、新しい博物館像を確立していくために、大変苦勞した時代であった。

初期の頃の学芸員という職種

（美術館の本）

石川県立美術館所蔵品図録 税込定価(円)三、五〇〇	石川県立美術館所蔵 茶道美術名品図録	二、五〇〇
前田育徳会展示室 開館記念名宝展	加賀藩一代藩主前田利長の菩提寺 瑞龍寺展	二、三〇〇
― 古典と現代 ― 花鳥風月展	15〜20世紀のロシア美術 イコンと絵画	二、〇〇〇
― 加賀文化の華 ― 前田綱紀展	日本のわざと美展 重要無形文化財とそれを支える人々	二、〇〇〇
ひと・ヒト・人物を描いて… 南政善回顧展	前田利為と尊経閣文庫	二、〇〇〇
石川県の人間国宝展	墨の表情 近代日本画にみる名作	一、八〇〇
西山英雄展 雄大な自然を描く日本画の巨匠	工芸作品と図案 創造への思考	二、〇〇〇
石川県の工芸 江戸時代から現代まで	前田利家没後400年 利家が生きた 桃山時代の美術	二、五〇〇
隅谷正峯展 日本刀その神秘なる彩り	没後25年 写実と幻想の巨匠 宮本三郎	二、三〇〇
前田育徳会の名宝 百工比照	初公開 欧州随一の日本美術コレクション ランゲン夫妻の眼	二、〇〇〇
開館10周年記念特別展 日本美の心	石川県立美術館所蔵 九谷名品図録(改訂版)	二、〇〇〇
石川県の美術 明治・大正・昭和の歩み	没後15年 一期は夢よ 鴨居玲展	二、〇〇〇
四巨匠 中川一政・宮本三郎・高光一也・南政善の世界	彫刻家 吉田三郎	二、〇〇〇
戦後日本の具象美術 見えるものへのこだわり	ミニージアムショップで販売中!!	
加賀大乗寺の名宝と月舟宗胡	郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。	
時絵・人間国宝 寺井直次の世界		☎〇七六 二二二一 七五八〇
没後10年 高光一也展		

五月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月 日	行 事	内 容	会 場
5/6(日)	月例映画会	ロダン美術館散策 職人の手がつかむ永遠のとき(22分) 茶の湯釜 角谷一圭のわざ(23分)	ホール
5/12(土)	土曜講座	仏像 38 磯城・葛城の仏像 (谷口 出 学芸専門員)	講義室
5/13(日)	小学生のための造形講座	「粘土で遊ぼう」(午後一時から。事前に申し込みが必要です。)	講義室
5/19(土)	土曜講座	能楽の意匠 2 (前田武輝 学芸主査)	講義室
5/20(日)	CDコンサート	パッハのカンタータ J.S.パッハ カンタータ第3番「あお神よいかに多き胸の悩み」 カンタータ第4番「キリストは死の縄目につながれたり」(約45分) 演奏 ニコロウス・アーノンクール 指揮 ウィーン・コンツェントウス・ムジクス他	ホール
5/26(土)	土曜講座	美術に見る香りの世界 (高嶋清栄 学芸専門員)	講義室
5/27(日)	月例映画会	現代彫刻 創る 本郷新の世界(31分) 竹工芸 飯塚小玗斎(30分)	ホール

全館休館日は五月二十八日(月)〜三十日(水)です。

貸出中の所蔵品

- 桃色地山道文摺箔 能装束
- 茶萌黄白段中格子桐丸紋鶴菱文厚板 能装束
- 姥 能面
- 二十余 能面
- 計四点

エナメル彩選挙侯文フンペン

- 計一点
- 展覧会 仙台開府四百年記念特別展
- 会場 仙台城 しろ・まち・ひと
- 会期 四月二十七日(金)〜六月三日(日)
- 会場 仙台市博物館

次回の展覧会

- 特集 一色とかたち― 歴代藩主の陣羽織
- 五月三十一日(木)〜六月二十四日(日)
- (前田育徳会展示室)
- 特集 中国の絵画と工芸
- 五月三十一日(木)〜六月二十四日(日)
- (第2展示室)

人事異動

- 今年度の当館人事異動は次の通りです。
- 転入
 - 総務課 中島義人(商工政策課より)
 - 学芸第一課 村上尚子(歴史博物館より)
- 転出
 - 学芸第一課 山口和夫(能登空港企画室へ)
 - 課長 北春千代(歴史博物館へ)
 - 学芸第一課 新規採用
- 総務課 小山暉雄 津田賢一 山岸武夫
- 退職 川合常彦 米林外茂明 庭野吉男

合香笠花絵色

野々村仁清

生没年不詳

江戸 17世紀

胴径6.7 底径3.3 高5.9 (cm)



室町も終わりの頃になると、茶の湯の風習も書院茶から侘びた草庵の茶へと移って行きます。それに付れて焚香はただ馥郁たる薫りをめぐるものではなく、その場の物象すべてを清める意味を持ち、茶席で香を焚くのはそのためとされます。しかし、香炉で香を焚く習慣は床の間の尊像尊筆をうやまうためのほか、ほとんどおこなわれなくなり、やがて香炉を飾ることも少なくなってきました。それにかわって香は、炭をつぐ、いわゆる炭点前の際に、夏は風炉、冬は炉に、直接香合より取り出して焚かれることになり、従って、香合は炭点前を演出する上で欠くことのできない道具として扱われるようになります。

この香合は、形やその装飾文様などにより花笠を思わせることから、それに見立てて名付けられたものです。印象的な形態に、青、緑、赤などの色絵と金彩を駆使し、仁清特有の華麗な文様が施されています。全体に薄作りで、蓋裏は露胎にロクロ目が一面に走り、身内部は明るい緑の釉薬がかけられ、底中央に「仁清」蘭形小印が認められます。江戸末期の加賀藩廻船御用商人、銭屋五兵衛が所持していたものと伝えられ、後に山川家の所有となり、当館にそのコレクションの一つとして寄贈されたものです。

野々村仁清は江戸時代前期頃、宮方や堂上方の好みを反映した、華麗で典雅な茶陶を制作した陶工として著名です。

(末吉守人 普及課長)

第2展示室で展示中

ミュージアムショップ通信

恒例の現代美術展で新年度も華々しく幕を開けました。そしてこの日よりがお手元に届く頃には「彫刻家吉田三郎展」がオープンしています。大型の彫刻展は本当に久しぶりのこと。担当スタッフも気合いが入っています。期待しているですよ。

さて当ショップにも新しいミュージアムグッズがお目見え。お待たせしました、「一筆箋」です。「えっ...? なかったの、今まで?」という声も聞こえてきそうですが、それはさておき、県美特製一筆箋は、「国宝色絵雉香炉」(写真左)をはじめ、「はんかい草の図」(同中)、「色変鶴菱文唐織」(同右)の全部で三種類。写真上は本物の「色変鶴菱文唐織」です。小さすぎてわかりにくいんですけど、肩と裾部分は鶴文様(向鶴菱)、それが幾何学的に連続して並んでいます。白っぽく見える腰の部分は、丁字唐草の連続文様で、多色と単色を対照的に組み合わせ、前田家伝来の華麗な能装束なのです。この名品を一筆箋の一つに取り入れてみました。さあとは使う人の腕次第。達筆でピシッと決めれば、いうことなしですね。



能装束 前田家伝来
色変鶴菱文唐織



一筆箋 (税込定価各300円)

休館日

五月二十八日(月)～三十日(水)

石川県立美術館だより

第二一一一号 平成十三年五月一日発行

〒九一〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(一三三)七五八〇

FAX 〇七六(一三四)九五五〇